

## 中学校、高等学校を通し、「主体的・対話的で深い学び」によって 資質・能力を育成する研究（成果報告）

香川県教育委員会

### 1. はじめに

新学習指導要領では、「総則」の中に「学校段階等間の接続」の項目が新設された。中学校学習指導要領には、「高等学校教育及びその後の教育との円滑な接続が図られるよう工夫する」とあり、高等学校学習指導要領においては、「中学校教育までの学習の成果が高等学校教育に円滑に接続され、高等学校教育段階の終わりまでに育成することを旨とする資質・能力を、生徒が確実に身に付けることができるよう工夫すること」とされている。

そこで、県教育委員会では、中学校、高等学校における各学習活動が、生徒にとって資質・能力を育むにあたってより効果的な学びの経験となるよう、中学校、高等学校間における円滑な「学びの接続」について、研究を行うこととした。

### 2. 研究の内容・方法

#### (1) 研究実施校

丸亀高等学校、坂出高等学校、香川大学教育学部附属坂出中学校

#### (2) 研究教科

国語、数学、英語

#### (3) 研究の方法

##### ○ 1年目（平成30年度）

研究の方向性を考えるにあたり、中学校、高等学校においてそれぞれどのような授業が行われているか、互いに参観し、その授業の目的や内容について共有する。

##### ○ 2年目（令和元年度）

中学校と高等学校との間において、「主体的・対話的で深い学び」につながる課題の設定、発問、手立てなどについて、どのようなことが可能か、互いの授業を参観することを通じて研究する。

### 3. 研究の成果と課題

#### (1) 資質・能力ベースでの指導の重要性

1年目は、各教科、互いの授業を参観し、研究テーマについて協議したが、現状の中学校と高校との学びの接続面について、共通の問題認識を持てなかったことから、研究テーマの決定には至らなかった。また、この背景には、中学校では新学習指導要領に則って「主体的・対話的で深い学び」の実践を進めている一方、高等学校では大学入試への対応を意

識した教育課程を編成し、生徒の進路実現に向けて教科指導を進めているという、指導上優先しているところでの違いがあると考えられる。

そこで2年目は、各教科、中学校と高等学校で共通の目標を設定するため、研究の焦点を、「学びの接続」から、『主体的・対話的で深い学び』によって資質・能力を育成することへと変更した。その結果、中学校と高等学校で、育成する資質・能力という上位の指導目標において、共通意識をもつことができた。この、新学習指導要領の基本的な理念に立ち返り、これからの教育の進むべき方向性について共通理解をもつことができたことが、本研究の一番の成果と考えている。

今後は、中学校と高等学校で資質・能力ベースでの一貫性のある指導目標を設定し、その中で「学びの接続」を意識して授業を進めることが重要である。そうすることで、任意の知識・技能を育成するなら中学校と高等学校の各学年でこのような工夫が可能か、とか、思考力・判断力・表現力等を伸ばすためにはこのような授業スタイルが効果的である、といった具体的な取組みも増えてくると考える。

## (2) 中学校と高等学校の教員の相互理解の重要性

中学校と高等学校で互いの指導状況を参観し、共に協議することを通じ、教員自身の授業観、教育観を広げることができた。今後、このように、積極的に中学校と高等学校で相互理解を育む機会をもつことで、中学校と高等学校とで、生徒の成長をより長いスパンで捉えた指導が可能になると考える。

## 4. 今後の取組の方向

### (1) 各教科の研究部会での研究の継続

現在でも、数学と英語において、公開授業や意見交換等を行っているが、今後は、数学、英語以外の教科においても、中学校と高等学校で互いに授業を参観し、共通して育成すべき資質・能力及び指導目標について協議する機会をもつことができれば、より中学校、高等学校間の学びを円滑にしようとする機運も高まると考える。

### (2) 「学びの接続」の各高等学校の特色づくりにおける活用

各校が特色づくりを進めていく上で、中学校と高等学校の「学びの接続」という観点は、有効なアプローチの一つになると考えられる。中学校と高等学校とで目的を共有し、生徒の実態に合わせて研究・実践していくことができれば、教育課程上の工夫はもとより、教育上の特色としても強いアピールができると考える。

### (3) 教育機器や教材開発における連携

中学校、高等学校ともに課題として挙げていたのが、数学、英語であれば、ICTの使い方や活用の仕方、またそれらを活用することで教育効果が期待できる分野の研究や教材づくりなどであり、国語であれば、複数の文章を比べ読みするための教材の蓄積や、教材づくりであった。今後、中学校と高等学校とで、資質・能力ベースの深い学びを推進し

ていくに当たっては、教育機器や教材開発での連携も必要になってくると考える。

#### (4) 中学校教員に対する情報発信の推進

中学生が希望する進路に基づき適切な高等学校選びをする上では、中学生、保護者のみならず、中学校教員に対しても、積極的に高等学校の教育活動について情報発信し、理解を得ておくことが重要である。そのためには、教科指導のほかにも、総合的な探究の時間の指導や、キャリア教育、学校行事など、様々な場面で、交流・情報発信の機会を設けていく必要がある。

### 5. おわりに

少子化やグローバル化、高度情報化などにより、社会全体の構造が劇的に変化し、将来を予測することが困難な時代にあって、生徒や保護者の学びのニーズは多様化している。また、学習指導要領の抜本的な見直し、令和2年度から始まった大学入学共通テストなど、現在、高校教育は大きな転換期を迎えている。

そのような中、本県では、「魅力あふれる県立高校推進ビジョン ～未来を生きる力を育む 特色ある学びの場をめざして～」を策定し、必要な教育環境の整備については、「グローバル社会への対応や郷土への理解、イノベーションを創出するために必要な資質・能力は、多様な価値観をもつ集団で共に学ぶことにより育まれる」としているが、このことは教員にも当てはまる。教員一人一人にとっても、資質・能力を向上させるには多様な教員集団の中で切磋琢磨する経験が不可欠である。そしてその教員集団の質を不断に高めていくことは、生徒にとって一番の教育環境の整備となると考える。

また、「ビジョン」では、教員の資質・能力の向上に向けての取組として、「他の校種の教員との交流、特に中学校の教員との連携を積極的に行う」ことを挙げている。少子化により各校の教員数が減少する中、校種の枠を超えて教員がつながり、連携して指導力を高めていくことは自然かつ有効な対応である。まして若年人口が首都圏に集中し、教育の地域格差が議論されている昨今では、校種の枠を超えて教員がつながることは、地方において、より重要と考えている。

### 6. 講評 東京学芸大学 教職大学院 齋藤 嘉則 教授

中学校や高等学校等の中等教育機関においては上級学校への進学実績は、生徒一人一人の希望を実現するという点においてとても重要である。現在、上級学校へ進学するために課される入試問題は多人数の生徒の「学力」を量的に測定して、それまでの生徒の学習状況を把握することから入学後の取組の可能性を判断してきた。しかし、少子化が急速に進行するにつれて入試の在り方が「量的」な測定から「質的」な測定に大きく転換しつつある。例えば、content-based education の成果測定から、批判的思考力、問題解決能力や自己調整学習能力など competency-based education の測定へと大転換しつつある。

後者は生徒が激動する世界情勢の中で生き抜いていくために必須とされる資質、能力を育む教育であるが、その育成には十分な時間をかけて取り組む必要があり、一朝一夕には

育成できない。中学校、高等学校の別なく **competency-based education** に焦点化した教育が求められたり、中等教育段階で中高一貫校の創設が全国的規模で進められたりしているのはそのためでもある。そして、後者を教室内の指導で具体化する手立ての一つとして提案されているのが、「主体的・対話的で深い学び」である。京都市にある堀川高等学校の実践は、**competency-based education** が **content-based education** を進路実績においても凌駕することを示し、公立高等学校の在り方に一石を投じている。補足であるが、それに比べて前者は反復練習を中心とした学習活動が中心で短時間でも成果を出し易いが、それによって得た知識や技能は、科学技術の発達により容易に人工知能に取って代わられることが予想される。

そこで、香川県には教育県として香川県独自の取組が期待される。その参考として、フィンランドの教育状況も視野に入れて考える必要がある。フィンランドでは、ほぼ全員の教師が修士号を取得している。このことは、教師が学部教育を経て修士課程で創造的な「研究」に取り組み、「研究」を遂行する知識や技能を習得しているということを意味している。生徒とともに真理を追究する「研究」ができ、「研究」指導することができるということなのである。真理を「研究」することは大学等の高等教育機関の専売特許ではない。この **competency-based education** の中核としては、まずはソフト面における、教師一人一人の指導の質の転換が求められる。教師の役割が教科書記載の知識や技能の伝達者という役割から、生徒と共に問いを立てて「研究」する役割へと変化しつつある。真理の一端を明らかにする、という役割が、これからの教師には求められているのである。

香川県教育委員会が実施した中高接続研究と教科ごとの報告を拝読すると、この研究に参加された高等学校の先生方の **competency-based education** へ向けた授業改善への意識の高さや真摯な姿勢が、まさに前述したような「研究」に取り組む姿勢とみて取ることができる。これは特筆すべきことであり、香川大学教育学部附属学校でのすぐれた取組と相俟って、この取組がさらに進展、発展することが大いに期待される。参加された先生方の所属は戦前の旧制中学校や高等女学校（小学校卒業後、修業年限4または5年）の流れをくむ地域の伝統校である。このことからこの取組に参加された各高等学校の校長先生の英断とともに、先生方の使命感がひしひしと感じられる。地域の中核校、伝統校のポテンシャルに大いに期待することができる、と率直に感じた次第である。

最後に、施策上、必要となる視点の一つについて述べたい。まず、この取組に参加された先生方の素養が多く、教員にも求められる。加えて、具体的な手立てとして、特に、修士課程段階の「研究」を経験されている先生方を一人でも多く採用、育成すること、配置することが必要だ。この視点は全国的には希有な視点である。前述したフィンランドの教育に見習う点はまさにそこにある。教育成果の可否は教師の資質、能力に相関する、と考えることができる。その意味で地元教員養成系学部・大学との大学院修士課程レベル、教職大学院レベルでの研究、研修の連携が重要であり、不可欠なのである。そのためにも教職大学院の現職教員の派遣事業の充実も必要である。

ここまで整えられ成果をあげている取組を、前述の視点により、一層充実していかれることを願ってやまない。

【研究メンバー及び活動実績】

○ 平成 30 年度 研究メンバー

	国語	数学	英語
丸亀高等学校	教諭 三原 洋子	教諭 大西 陽子	教諭 藤谷 丈雄
坂出高等学校	教諭 熊坂 志保	教諭 藤阪 秀美	教諭 鳥取 幸恵
香川大学教育学部 附属坂出中学校	教諭 大西 小百合 教諭 田村 恭子	教頭 大西 光宏 教諭 渡辺 宏司 教諭 山田 真也	教諭 明田 典浩 教諭 伊賀 梨恵
教育センター	主任指導主事 山田 眞粧美 主任指導主事 植村 律子	主任指導主事 浅野 正敏 主任指導主事 村川 和也	主任指導主事 今田 紫
義務教育課	主任指導主事 土岐 浩司	主任指導主事 清水 一郎	主任指導主事 植田 浩之
高校教育課	主任指導主事 溝渕 正起	主任指導主事 佐伯 卓哉	主任指導主事 横井 透

※ アドバイザー 香川大学教育学部教育学研究科 齋藤 嘉則 教授

○ 平成 30 年度 活動実績

	開催日	会場	内容	授業者
全体会	6月29日(金)	附属坂出中	ガイダンス、協議	
英語①	10月24日(水)	坂出高等学校	授業参観、研究協議	鳥取教諭
数学①	10月31日(水)	坂出高等学校	授業参観、研究協議	藤阪教諭
国語①	11月6日(火)	坂出高等学校	授業参観、研究協議	熊坂教諭
数学②	11月13日(火)	附属坂出中	授業参観、研究協議	山田教諭
国語②	11月21日(水)	附属坂出中	授業参観、研究協議	田村教諭
国語③	12月12日(水)	丸亀高等学校	授業参観、研究協議	三原教諭
英語②	1月28日(月)	附属坂出中	授業参観、研究協議	伊賀教諭
英語③	2月12日(火)	丸亀高等学校	授業参観、研究協議	藤谷教諭
国語④	2月14日(木)	附属坂出中	授業参観、研究協議	大西教諭

○ 令和元年度 研究メンバー

	国 語	数 学	英 語
丸亀高等学校	教諭 西田 弥生	教諭 佐藤 和哉	教諭 西岡 大
香川大学教育学部 附属坂出中学校	教諭 木村 香織 教諭 田村 恭子	教諭 渡辺 宏司 教諭 山田 真也	教諭 伊賀 梨恵 教諭 眞鍋 容子
教育センター	主任指導主事 植村 律子	主任指導主事 浅野 正敏 主任指導主事 村川 和也	主任指導主事 今田 紫
義務教育課	主任指導主事 土岐 浩司	主任指導主事 小山 圭	主任指導主事 坂本 幸治
高校教育課	主任指導主事 溝渕 正起	主任指導主事 佐伯 卓哉	主任指導主事 笠井 真希子

※ 協力 詫間 裕一 主幹教諭

小山 初美 国語科主任、佐野 英二 数学科主任、山地 君代 英語科主任

※ アドバイザー 香川大学大学院教育学研究科 齋藤 嘉則 教授

○ 令和元年度 活動実績

	開催日	会場	内容	授業者
拠点校説明会	6月13日(木)	丸亀高等学校	ガイダンス、協議	
英語①	8月22日(木)	丸亀高等学校	研究協議	
数学①	10月30日(水)	附属坂出中	授業参観、研究協議	渡辺教諭
英語②	11月6日(水)	附属坂出中	授業参観、研究協議	眞鍋教諭
数学②	11月11日(月)	丸亀高等学校	授業参観、研究協議	佐藤教諭
英語③	11月12日(火)	丸亀高等学校	授業参観、研究協議	西岡教諭
国語①	11月13日(水)	丸亀高等学校	授業参観、研究協議	西田教諭
国語②	11月20日(水)	附属坂出中	授業参観、研究協議	木村教諭
成果発表会	12月18日(水)	丸亀高等学校	研究授業、研究協議	西田教諭 佐藤教諭 西岡教諭